

広瀬淡窓・広瀬旭荘と洋学

序論

大倉精神文化研究所研究員
國學院大學講師

三澤勝己

はじめに

- 一 広瀬淡窓の洋学観
 - 二 淡窓と禁書及びその経世論
 - 三 広瀬旭荘の洋学観
 - 四 旭荘と洋学関係書及びその経世論
- おわりに

はじめに

広瀬淡窓（天明二年～安政三年～一七八二～一八五六）は門弟数千人を輩出したという私塾咸宜園の塾主として、また近世後期の西日本において菅茶山と並称される漢詩人（生地は豊後国日田、生涯のほとんどもを日田で過ごした）として知られている。広瀬旭荘（文化四年～文久三年～一八〇七～一八六三）はその末弟であり、清末の大儒俞樾に「東国詩人之

冠^①」と評されたように兄同様、漢詩人として知られる。

この二人は共に儒者であつて、洋学に関する専門的な著書を残しているわけではないが、近世後期という時代状況もあつてその関心は高く、洋学者との交遊も認められる。しかし、両者と洋学との関係を論じている研究は少なく、管見では淡窓について杉本勲氏「咸宜園と洋学」、旭荘に関しては同じく杉本氏の一連の論文「広瀬旭荘をめぐる洋学者たち」^③「広瀬旭荘と江戸の蘭学者群像」^④「広瀬旭荘の海外認識と海防思想」^⑤や、梅溪昇氏の「緒方洪庵と適塾生」^⑥「日間瑣事備忘」にみえる^⑥」が挙げられるだけである。

これらの内、梅溪氏の「緒方洪庵と適塾生」は、旭荘の一六六巻に及ぶ膨大な日記『日間瑣事備忘録』から、緒方洪庵と適塾門下生の関係記事を抄出したものである。従つて、淡窓・旭荘の洋学観を検討する上で、対象となる先行研究は杉本氏の諸論稿である。しかし、杉本氏に取り上げておられない両者の言葉や、杉本氏が細部で誤解されている点もあると思われるので、改めて両者の発言を検討して、その洋学との関連を考察することも無意義ではなからう。そこでこの小稿では、淡窓次いで旭荘の順に、二人と洋学との関係を論じていきたいと思う。

一 広瀬淡窓の洋学観

淡窓は自叙伝『懷旧樓筆記』^⑦卷二十七の文政十二年（一八二九）の項において、シーボルト事件の報を聞いた記事で、

此事起リシトキハ、専ラ彼国ヨリ我邦ヲ襲フ謀アル様ニ申シ沙汰セリ。是全く兒女俗人ノ見ナリ。総テ彼国ノ学問ト云フハ、格物窮理ヲ主トシテ、天地間一物不レ知ヲ以テ憾トス。故ニ我邦ノ事ヲ搜索スルモノニシテ、姦謀邪計アルニハ非ス。

と述べている。これは杉本氏が、「蘭学の本質と西洋人の学問にたいする厳しい態度を的確に指摘」(「咸宜園と洋学」)と言われたように、淡窓の見識を示していよう。淡窓は批評家としても優れた資質を持っていた人と思われ、『儒林評』にそれは端的に現われているが、このシーボルト事件に対する論評もそれを窺わせる。

それでは淡窓の洋学観を、その発言から具体的に検討してみよう。なお、杉本氏が挙げられたもの以外にも、淡窓の著作の中には洋学に関して言及した部分があるので、極力それらを網羅してみたい。先ず、『六橋記聞』巻一で次のように言う。

知_レ有_二五大洲_一。則漢之土地。不_レ過_二一蛮触_一耳。而学者専_レ以_レ漢為_レ法。則不_レ勝_二其固_一。故宜_下以_レ漢為_レ主。以_二異邦之学_一補_レ之。欲_レ通_二異邦之学_一。宜_下命_二阿蘭_一使_レ齋_レ諸邦之書_一以來。而訳者後訳_レ之。儒者裁_レ之。則五大洲之事。歴_二然于眼前_一矣。守_レ漢而不_レ通_二異邦_一。則固而不_レ豁。通_二于異邦_一而不_レ主_レ漢。則博而不_レ約。以_レ漢為_レ主。以_二異邦_一助_レ之。則豁而不_レ固。約而能博。庶_二幾於博文約礼之意_一乎。

ここから、淡窓の寛容さが窺えよう。そして、「故に宜しく漢を以て主と為し、異邦の学を以て之れを補ふべし」「漢を以て主と為し、異邦を以て之れを助けしめば、則ち豁にして固ならず、約にして能く博し」という部分からは、儒学を核として、洋学を補助学となしてその必要性を認めていることがわかる。

また、『夜雨寮筆記』¹⁰巻四では、「百年以来、和学蛮学ノ二種、世ニ起レリ。其本儒学ヨリ出テ、一変シタルモノナリ。」と、国学と共に洋学は儒学から派生したとしている。また、先に挙げた『六橋記聞』巻十には、

漢大国也。聖哲多出。隣_二於我邦_一。古來取_レ範者。既過_二千載_一矣。近世四夷八蛮之説。來入_二我邦_一。窮理之密。製

器之巧。往々出_レ於漢人之上_一。學者遂欲_下全廢_二漢說_一而從_レ於彼_上。則過矣。天之生_レ民。以_二邦域_一限_レ之。支那与_レ我。地脈一也。人情同矣。焉得_下全捨_二其近_一而專取_レ於遠_上乎。但漢說間有_下不_レ便_二我邦_一者_上。是同中之異也。不_二必學_レ彼而可也。

と見えてゐる。「窮理の密、製器の巧、往々漢人の上に出づ」と洋学の優秀さを認める反面、儒学に依拠すべきことも説いている。

次に漢詩を取り上げよう。淡窓には、「觀_二唐蘭館_一有_レ作_二二首_一。」という古体詩がある。これは弘化二年（一八四五）に再度長崎を訪れたこと（初訪は天保十三年（一八四二））に基づく詩と思われるが、杉本氏は読み下しを付されていないので、その第二首を読み下して掲げる。¹¹

西説未_レ来六合仄

地傾_二東南_一天西北

蘭書既至四維張

始覺鄒衍不_二荒唐_一

蘭学行漢学鄙

磨牙反目互相訾

我喻_二後生_一勿_レ復然_二

紅髮碧瞳異類耳

豈比支那与_レ我地脈本相通

西説未だ来らざれば六合仄く

地は東南に傾き天は西北

蘭書既に至り四維張り

始めて覺る鄒衍の荒唐ならざるを

蘭学行はれ漢学鄙しまる

磨牙反目互ひに相訾る

我後生を喻すに復た然らしむる勿かれと

紅髮碧瞳は異類のみ

豈比ぶるに支那と我と地脈本相通じるも

人心物態皆一軌

人心物態は皆一軌ならんや

医術天文彼亦工

医術天文彼も亦工み

録_レ長捨_レ短論乃公

長を録し短を捨つれば論乃ち公し

今宵我且借_ニ彼望遠鏡_一

今宵我且く彼の望遠鏡を借りて

一時看破_ニ広寒宮_一

一時に看破す広寒宮

洋学の中でも蘭学を取り上げ、それに好意的であるが、儒学と争うことには批判的である。

今挙げた詩の中に、五行説を唱えた戦国時代の思想家鄒衍が出ていますが、『夜雨寮筆記』巻一には「五行ノ理、是ニ拘泥スレハ、頗ル害アリ。拘泥セサレハ害ナシ。然レトモ、終ニ火氣水土分ツノ明確ナルニハ及ハス。是蘭説漢説ニ勝ルナリ。」と見えている。また、『淡窓小品』¹²巻上には弘化四年に書かれた「接痘編序」(「丁未季春書」とあり)が収録されているが、ここでは種痘が取り上げられている。筆者には不明であるが、林子文の『接痘編』という作品に付された序で、その中には「夫制度之創_ニ於秦後_一。或勝_ニ三代_一。竺乾荷蘭之説。或精_ニ於漢_一。」とインドと共にオランダの説が、時には中国よりも精しいと述べている。

続いて、教育に関する淡窓の見解を眺めよう。その経世論著『迂言』¹³の「学制」において、

学校ノ制ハ、文武ノ両学ヲ分ツテ、之ヲ建ツヘキナリ。文学ニテハ、経学、歴史学、諸子学、文章学、兵学、医学、天文学、和学、職原学、蘭学、書学、数学、諸礼学ナト、一切文字言語ヲ以テスル事ノ、国用ニ供スヘキコトハ、皆教官ヲ置キテ、科目ヲ分チテ研究スヘシ。

と論じている。これについて杉本氏は、「蘭学のほかに兵・医・天文・数の諸学を羅列しているが、医に本草、数に測量を加えれば、当時まだ漢学系統の諸実学が残存していたものの、それらがすでに蘭学の主要科目になりつつあったことは、すでによく知られていたから、淡窓もその含みをもって教科目に掲げたものと思われる」(『咸宜園と洋学』)と
言われている。その他、『迂言』では「国本」に「異国ノ事トテハ、少シニテモ、其レヲ取り用フルヲ、恥辱ノ様ニ思フ。」「学制」に「学校稽古ノ次第、素読ヨリ文章ニ至ル迄ハ、一統ノコトナリ。其上ハ人々ノ志ニ随フヘシ。或ハ経義ヲ研究シ、或ハ、百家ヲ博覧シ、或ハ詩漢文ヲ学ヒ、或ハ和学蛮学ナト、各其師ニ随フヘシ。」と見えている。

また、『約言或問』(国文)⁽¹⁴⁾の第二十「学ニ科目ヲ分ツノ弁」でも、

喩へハ当時諸侯ノ内ニモ、大国ハ儒官ノ二十人モアルヘシ。其内ニテ科ヲ分チ、経術家・歴史家・文章家・天文家・和学家・軍学家・蛮学家ナト云フヤウニ定メテ、事多キ科ハ、一科ニ数人ヲ用ヒ、事少キハ一人ニテ二科ヲ兼ヌルモアルヘシ。総テ当時ノ学ハ科目ヲ分ツコトナキニヨリテ、人ノ知リタルコトヲ我知ラサレハ恥ニナル故ニ、競テ同シ路ニ走ル。

……………中略……………

和学蛮学軍学ナトハ、今ハ儒者ノ与ラヌ事ニ成リタレトモ、右ノ如クスル時ハ、儒家科目ノ一端ニ備ヘテ、是モ学校ノ内ニ具フル様ニナル也。

と述べ学問の分化の必要を説き、洋学も科目の中に位置を占めている。この史料についても、杉本氏は「そこでは蛮学⇨洋学も天文学・軍学などをふくめて、堂々と市民権を獲得しており、専門家⇨達人の出現が期待されている」(『咸

宜園と洋学」と述べておられる¹⁵。

これまで見てきたように、あくまでも儒学を基本としながらも、洋学に好意を示し、その長所を認めようとしている。その要因の一つとして、杉本氏が「自由闊達な学風」（咸宜園と洋学）と言われたように淡窓の学問の持つ寛容さが挙げられよう。それと関連して、前引の『迂言』の「学制」からも窺えるような実用の学への志向も指摘できよう。しかし、全面的に洋学を肯定しているわけではないので、淡窓の洋学に対する批判的言辞を次に見てみよう。

『六橋記聞』巻二には、「大人每愛和蘭二学。為吾道之害。嘗有二聯。曰。阿蘭陀学如天狗。伊呂波流是井蛙。伊呂波流斥和学也。」とあって、淡窓が国学と共に蘭学を、道を害うものとして心配していたと述べている。それほどのような点であったのだろうか。同書の巻一でも、「我邦仏法盛行。近又有和蘭二学。和学以攻我儒為事。蘭学雖不毀聖人。亦摘漢之短者也。……中略……二学新興。不攻儒者。則難立其道。猶魚在涸轍中。非一躍求水。則命絕於頃刻也。故其說雖微。亦我患也。」と蘭学は国学と共に挙げられ、新興の二学はあたかも涸轍の中にあるのと同じで、故に儒学を批判するのであるとし、ここでもわが患いであるとしている。

また、『夜雨齋筆記』巻四の先に引用した文のすぐ後で、

（和学集一）
著者註
二ツノ者、皆務メテ漢学ノ弊ヲ挙ケ、儒者ノ過ヲ斥ス。漢学固ヨリ弊アリ。儒者亦過アリ。其言当ラサルニハ非レトモ、炎々ノ言、罵リ聖人ニ及ヒ、堯舜周孔ヲモ呵叱スルニ至ル。是我道ノ蠹害、国家ノ弊事ナリ。然ルニ、儒者恬トシテ之ヲ省セス。専ラ漢宋ノ異同ヲ弁論シテ、門派ノ高低ヲ競フニ汲々タリ。……中略……儒者徒ニ詩書ノ訓ヲ奉スルコトヲ知りテ、我国ト西土ト、国體人情、大ニ同シカラサル所有ルコトヲ察セス。是レ和学者ノ非問ヲ招ク所以ナリ。儒者徒ニ漢土ノ美ヲ称スルコトヲ知りテ、五大洲ノ大ナル、漢ノ如クナル者、猶幾クモ有ルト云フコトヲ知ラス。

此レ蜜学者ノ嘲ヲ来ス所以ナリ。故ニ儒者先ツ此ノ弊ヲ改メテ、和漢ヲ融洽シ、華夷ヲ通同シ、井蛙望天ノ見ヲ去リ、夏蟲疑氷ノ陋ヲ攻メハ、二学ノ徒ハ、自然ト口ヲ閉ツヘシ。

と述べており、儒者同士の争いを戒め、蘭学・国学が儒学を攻撃することを批判している。これは前掲の漢詩「觀唐蘭館有作二首」の、「蘭学行はれ漢学鄙しまる、磨牙反目互ひに相訾る、我後生を喩すに復た然らしむる勿かれ」との部分にも相通するものであろう。

淡窓は一方では蘭学に好意を示し、それを認めながらも、他方では蘭学の流行を警戒して、殊更に儒学を非難することに否定的である。淡窓の憂慮はそこにあつたものと思われる。

二 淡窓と禁書及びその経世論

次に、淡窓が洋学に関連する書物の内、何を読んでいたかを見てみよう。これについては、徴証となるものが極めて少ないのであるが、その中にある『三山論学紀』¹⁷ 閲読が注目される。

『三山論学紀』は周知のように、艾儒略（ジュリオ・アレシ）の天主教教理書であり、江戸時代前期より禁書とされた。同書は後期に流布し、平田篤胤の『本教外篇』¹⁸ がその影響を受けていることが指摘され、佐藤信淵・古賀侗庵らも読んでいたことが確認されている。それを淡窓も閲読していた証左がある。

同書のが見えるのは、先ず『懐旧楼筆記』¹⁹ 卷二十七の先に引用したシーボルト事件に関する記事の後段のところ、愛弟子の岡研介¹⁹ について、

コノコロハ、長崎ヲ去ツテ、赤馬関ニ客タリシガ、長崎大尹ヨリ急ニ召サル、コトアリテ、彼地ニ赴ケリ。世上

ニテハ、皆蘭医ノ事ニ坐セラレタル由、専ラ沙汰セリ。是伝聞ノ誤リナリ。研介カ召サレタルハ、禁書ノコトニヨレリ。此比長崎ニ他邦ヨリ来学ノ書生アリ。三山論学記ト云フ書ヲ読居タリ。是ハ明末西洋ヨリ来リシ艾儒略カ所著ニシテ、天教ノ事ヲ申セシモノナリ。聖堂ノ教授向井某其事ヲ官府ニ訟ヘタリ。因ツテ書生ヲ執ヘ、詰問アリシニ、研介ヨリ借用セシ由ヲ申ス。研介モ亦人ニ借りタルナリ。

と述べ「咸宜園と洋学」、「九州天領の研究」に引用²⁰、研介は「古物市ニテ買ヒタリ、未タ見ルニ暇アラス」と答えたこと、同書は高橋景保から吉雄忠次郎が借用したものであったことなどが記されている。

この『三山論学紀』については、(文政十年)五月二十九日付の研介宛淡窓書簡にも見え、その中に「三山論草記久々留置不堪感荷候 騰写相済候而 此節市右衛門へ託 御返呈申候 御入手可被下候 已克篇辱落手仕候 是ハ今暫拝借奉願候 以御蔭珍異之品及寓目之段 重疊感佩仕候」(返り点筆者)とある。²¹この手紙が文政十年のもので三山論草記が『三山論学紀』であるとすれば、シーボルト事件直前に淡窓は研介から同書を借りて騰写していたことになる。前掲の『懐旧楼筆記』巻二十七の「是ハ明末西洋ヨリ来リシ艾儒略カ所著ニシテ、天教ノ事ヲ申セシモノナリ。」という記述からも、淡窓が本書を窺知していたことを思わせる。

研介からは青地林宗の物理書『気海観瀾』も借用している。淡窓の日記『欽斎日曆』²²巻一の文政十一年六月十一日条に、「春次郎自長崎回。致岡研介書。及気海観瀾。」とあり、同巻二の同年七月二十二日条に「音平之長崎。反気海観瀾於岡研介。」とある。シーボルト事件直前に、研介から同書を借りて約一ヵ月後に返却している。これもおそらく騰写したことであろう。

このように僅かな証拠しか今のところないが、淡窓の洋学関係閲読書目の考究や、杉本氏が言及しておられる「咸

宜園と洋学) 洋学者(坪井信道・伊東玄朴・武谷元立・百武万里・高島秋帆・小石元瑞など) 及び淡窓門下の洋学者(岡研介・矢田淳・武谷祐之・松下元芳・上野彦馬など)との影響関係について今後検討する必要があると思われる。

さて次いで、淡窓の経世論を見てみよう。宮崎道生先生は、儒学の蘭学に影響を与えたものとして、窮理・経世済民の意識・利用厚生 of 観念の三点を挙げておられる。この内、経世済民の意識と利用厚生 of 観念は連関するものであり、海外知識の獲得や江戸時代後期に盛んとなる海防論とも関わってこよう。淡窓は一生を在野で過ごした儒者ではあるが、経世済民の意識と無縁ではなく、それは前掲の『迂言』という著作があることから明らかであろう。加えて江戸時代後期という状況から、海外情報への関心が淡窓にも窺われる。この点について杉本氏は、淡窓の日記の年末にある提要を引用されているが(九州天領の研究)、その著述からは他の部分からも関連した記載があるので、それらに言及してみたい。

その自叙伝と日記から取り出してみると、先ず弘化元年六月二十九日条の日記に「聞西蛮有警。(以下割註) 蘭人告以將有寇至。西諸侯皆修武備云。」とあり、同年七月七日条に「聞蘭船信。(以下割註) 本月二日蘭船達崎。八千石大船。載兵士三百二十人。及諸武器云。奉国王命。將致国書及信物於大府。以非商船。不遵旧例。是以不許著岸。以肥筑戌兵備之。待官命云。」と見える。この七月七日条は、オランダ国王の開国勧告の親書を携えた特使コープスに乗せた軍艦パレムバンの長崎入港のことを記している。翌二年七月九日条には「聞英夷船以本月四日着長崎。」、同十四日条「聞英夷船去長崎。」、翌三年六月十一日条「聞蛮船至崎。」と記され、嘉永年間に入ると関係記事が頻出する。その一々については省略するが、嘉永六年六月二十三日条「聞蛮船至浦賀。」がペリ来航、同年七月二十二日条「聞異船至長崎。」がプチャーチン来航のことを示している。

また書物に関しては、塩田順菴の『海防彙議』が注目される。これは日記の嘉永六年十一月十一日条に見えるところ

ろで、「始説海防彙議。」（以下割註）塩田順菴所纂。凡二十七冊。府内侯秘府之藏。特借予使觀。」とある。その他、弘化二年に招かれた大村での琉球とフランスの往復書簡の講義（同年四月五日条「未牌之千年館」公引見。講琉球。仏蘭西往復書。」）、嘉永六年のペリー持参のアメリカ国書の訳及び徳川齊昭上書の閲覧（同年八月七日条「説蛮船国書訳。及水戸侯上書。（以下割註）蛮船。亜墨利加船。国書言下求交易事。水侯書。言防禦之方。」）、安政元年のロシア米書訳の閲覧（同年正月八日条「觀鄂羅斯米書訳。（以下割註）彼宰臣致書御老中。」一求正境界。二求通交易。」）なども注意されよう。

これまで見てきたところからも淡窓の対外情勢への関心の高さが見えるが、他の著述から今少し言及しておこう。「六橋記聞」巻七には、「当今夷船之来。輒大召諸侯兵。甲冑旌旗相望於道。而未嘗有戰鬪之事。諸侯狂以為常。是与周王揚烽。其情不同。其勢則一也。一旦有艤艦蔽海。砲銃向城之日。則有意外之變。不可不慮也。」と見えている。また、「送人遊宦長崎」という五言古詩がある。それを掲げると、

瓊浦諸蕃会

繁華二百年

関門臨海岸

閩井接山嶺

夜燭珠璣市

春帆書画船

俗豪人競侈

境僻吏多權

瓊浦に諸蕃会し

繁華すること二百年

関門は海岸に臨み

閩井は山嶺に接ぐ

夜燭珠璣の市

春帆書画の船

俗なる豪人は侈を競ひ

境僻の吏には権多し

赤狄情難_レ測

赤狄の情は測り難く

紅夷信未_レ伝

紅夷の信は未だ伝はらず

憑_レ君囑_二官長_一

君に憑む官長に囑すれば

慎勿_レ廢_二防辺_一

慎みて防辺を廢すること勿かれと

である。これらからも海防に対する淡窓の意識が示されていよう。そしてその具体的提言が、『迂言』『論語三言解』の経世論著である。両書の内容については中島市三郎氏・小西重直氏⁽²⁸⁾などの先行研究があり、洋学観との関係についても杉本氏が指摘しておられるので(『九州天領の研究』)ここでは割愛するが、例えば『論語三言解』⁽³⁰⁾では、

兵船武器ノ類、新製ヲ始ムルヲヨシトス。古ハ長刀ヲ用ヒシニ、今多ク槍ヲ用フ。古ハ弓アルノミ、今ハ鉄砲ヲ用フ。万事ノ制度、皆是ノ如シ。天地ノ氣運、人情ノ變態ニ從ハザルコトヲ得ズ。今時ハ先蛮國ノ制ニ倣ツテ大船ト大砲トヲ作ルベシ。

と提案がなされている。

以上述べてきたように、洋学とそれに連関する対外情勢への淡窓の関心は決して小さくなかったことが明らかである。

三 広瀬旭莊の洋学観

旭莊と淡窓の間には、種々の点で異なつたところがあった。それは先ず、容貌・書風・性格に窺われる。この内、

書風については武藤長平氏がかつて、淡窓は「端嚴な氣品」、旭莊は「雍容豊潤たる中に一派の霸氣」がそれぞれあると指摘された^①。「書は人なり」というが、両者の書には一見して氣質の違いをも思わせる相違がある。その性格についても、温厚篤実な淡窓に対して、旭莊には短気で激しいところがあった。それを自ら、「余力性暴急ニテ」（『追思録』）「壯年ヨリ剛急ニシテ、怒り易ク、多言ノ癖アレトモ、今ハ少シハ止ミタリ。」（『九桂草堂隨筆』卷九）などと述べている。この相違については旭莊も意識していたと思われ、『九桂草堂隨筆』に幾つかの逸話が載せられている。一例を挙げると、堺で開塾してからのこととして風呂屋を懲らしめる話が記されている（卷九）。門生十五六人と共に風呂屋に行つた旭莊は、その湯が熱すぎるので埋めてくれと頼む。その家の子どもが大きい杓で水を二杯入れただけで、それ以上は水を入れない。その家の妻に、旭莊は熱くて湯に入れないので帰るから湯銭を返すようにと頼むが拒否される。その妻が、中に入れる熱さの湯に入らず帰るのだから湯銭は返せないという趣旨の返答をしたので、旭莊は水を埋めた子どもを門生に命じて湯の中に無理矢理入れ、その妻と夫が謝罪するという話である。その後、懇意となつた風呂屋の主人は「先生ハ畏ルヘキ人ナリ」と言つたと記され、旭莊は「此事我モ今ハ決シテセサルコトナリ。家兄ハ少年ノ時モ、必スナキコトナリ」と淡窓について語っている。これなどは、両者の性格の違いを示す興味深い話であろう。

また、足跡も対照的である。淡窓が病弱のため生地日田をあまり離れることがなく、長門の赤間関に渡つたのが九州を離れた唯一の体験であつたのに対して、旭莊の方はやはり病弱でありながら、堺・大坂から江戸にも住し四方に遊んでいる。さらに、読書量についても同様のことが言えよう。淡窓は「予幼ヨリ多病ニシテ、加フルニ眼疾ヲ以テセリ。弱冠以後、漸ク甚シ。眼力ヲ用フルコト少シク度ニ過クレハ、眼中熱ヲ生シ、且ツ痛ヲ発ス。是ニ因テ、細字ヲ書キ、細字ヲ看ルコト、務メテ之ヲ省ケリ。」（『夜雨寮筆記』卷二）と述べるように、その読書量に制限を受けていた。旭莊の方はと言うと、同様に眼疾に苦しみながらも、「三十マテニ、涉獵スルトコロノ大略、三鏡、六国史、日本史、藩翰譜等ノ国書、十三経、漢魏叢書、十七史、弘簡録、明史、資治通鑑、八編類纂、文獻通考、李氏函海等、及

と諸家ノ詩文集、數百千卷。」〔九桂草堂隨筆〕卷二〕と述べるように驚くべき読書をしている。

その一方では、両者に共通点も少なからず見受けられる。『九桂草堂隨筆』を開くと、「儒者ノ言、仏老ノ高妙ニ比スレハ、卑凡ナリト云フ。思フニ、棟梁トナスハ松柏ナリ。瓊林琪樹ハ無用ナリ。食物トナスハ穀蔬ナリ。靈菌芝草ハ無用ナリ。総テ有用ノ者ハ、必ス卑凡ナリ。」(卷二)、「夫子ノ四勿、固ヨリ後人ノ企ツヘキニ非ス。別シテ宋儒ハ、如何ナル大賢ニテモ、意必固我ノ弊ヲ免レ得ズ。」(卷一)、「論語」子罕篇「子絶四、母意、母必、母固、母我」に基づく、「某県令ノ時、屢譴ヲ被リシコトハ、余カ一時ノ殃ニシテ、終身ノ福ナリ。ソレマテハ、唯書ヲヨムコトヲ知りテ、人情世態ヲ毫モ解シ得ズ。其レヨリシテ、今日ノ事、皆学ナリト云フコトニ心付ケリ。」(卷九、県令は西国筋郡代塩谷正義のこと)などがある。これらから、特定の立場を墨守することを嫌う寛容さ、空理空論を離れ現実に立脚しようとする姿勢が見えよう。これは前述のように、淡窓にも見られるところであり、両者の学問の共通点であろう。なお、旭荘には淡窓以上に歴史への強い関心が見られ、「歴史ハ經書ノ註釈ナリ。今日ノ事ハ、歴史ノ註釈也。」〔九桂草堂隨筆〕卷二〕とまで言っている⁽³⁴⁾。

それでは、旭荘の洋学観を検討してみよう。(年未詳)七月十日付の広瀬青村宛書簡で、旭荘は「江戸の方洋学流行候唐の歴史而已ニては 史家と不_レ可_レ謂 五大洲の事ヲ成丈吟味致度物也」〔咸宜園と洋学〕、「九州天領の研究」〔広瀬旭荘の海外認識と海防思想〕に引用)と広く海外のことを知る必要を述べている。これは(年未詳)十二月十八日付林外宛書簡の、「今度秘書追々入手候処 洋人墨夷 垂_ニ饑涎于我_一 非_ニ一朝一夕之事_一 廊廟壅蔽ニて今年迄世上ニ不_レ知也 何れ不_レ遠土崩の勢と被_レ察候 有用の学ヲ成して時機ニ応候事專_一也」の「有用の学」にも通ずるものである。う。「児孝ニ示ス書ノ写」〔梅墩叢書〕乾所収⁽³⁵⁾の「今ノ世ニ生タル者能ク夫子ノ意ヲ迎テ学トセハ独支那ノ書而已ニ沈溺スヘカラス」〔広瀬旭荘の海外認識と海防思想〕に引用)という部分にも共通するものがある。これらからは、変動する時代状況の中で海外に通暁する必要性が強く意識されているように思われる。

さて、旭莊の洋学觀を典型的に示す発言は、管見では極めて少ない。それを現わしているのが、『九桂草堂隨筆』卷六の次の文章である（「広瀬旭莊の海外認識と海防思想」に要約され一部引用）。少し長文になるが掲げてみよう。

今ハ、洋夷ト交通ノコト起レリ。然レハ蘭学ハ必用ノ具ナリ。併シ蘭学スル者、皆没字碑ニテ、彼書ヲ我六経四書同様ニ心得、僅ニ数卷ヲ読メハ、漢土ノ聖人ハ迂濶ナル者ナリトテ、愚弄スルニ至ル。余曾テ蘭学者ニ、吾子我邦ニ生レテ、聖人ヲ侮リ、神道ヲ蔑ロニス。其道トスル所ハ、何ノ道ソヤト。其人曰ク、我道トスルトコロハ、西洋ノ道ナリ。余カ曰ク、吾子ノ首幾ハク有リヤ。其人愕然トシテ答ヘス。余カ曰、西洋ノ道ハ、天主教ナリ。若其道ヲ以テ道トセハ、一日モ我邦ニ居ルヘカラサルナリト云フ。総テ西洋ノ道ナト、云フコト、失言ナリ。是ヲ知ラサル位ニテ、我邦、列聖ノ立テ置レシ聖人ヲ非薄スルハ、乱民ト云フヘシ。故ニ蘭書ハ一通リ六経四書ヲ解シ得タル上ニテ、読マシムヘシ。然ラサレハ、後世ニ到リ、如何ノ乱民出ルモ測リカタシ。

外国との交通という現状認識を踏まえ、「蘭学ハ必用ノ具ナリ」と明確にその必要性を認めている。しかし、西洋の学に全面的に依拠することを否定、「蘭書ハ一通リ六経四書ヲ解シ得タル上ニテ、読マシムヘシ。」と述べるように儒学こそが根幹であると主張する。これは当時の典型的な儒者の見解であろうが、既述の淡窓の認識と共通するものがある。

『九桂草堂隨筆』卷六には、今引用した部分に引き続いて次のようにも言っている。

元和以来二百三十四十年、国家安穩、文恬武熙セリ。然ルニ異国ハ、百年来戦闘ノ事多ク、近年ハ猶更ノ事ニテ、其砲術、又ハ器物等、造化ノ秘ヲ極メタリ。独リ我邦ノミ、毫モ外間ノ事ヲ知ラス。故ニ近来異船頻リニ近ツ

キ来ルハ、彼カ力、能ク近ツキ来ルニ非ス。全ク天ノ我 邦ヲシテ、外間便利ノ事アルヲ知ラシメ玉フ時節到来スルナラン。然レハ我モ天ノ意ニ随ツテ、此時ニ当リテ、今迄ノ頑固ナル風習ヲ変シ、砲術ヲ始メ、一切便利ナルコトヲ伝ヘ、永ク我 神州ヲ守ルノ具トナスヘキコトナリ。

さらに続いて、

今外夷ノ砲術、及ヒ便利ノ器具ヲ伝ヘント欲セハ、志シアル者ハ、西洋ノ書ヲ研究セサルヘカラス。唯彼カ所謂道ハ、天主教ニテ、器具ノ外ハ取ルニ足ルコトナシ。然ルニ横文字ヲ読ムコトヲ知レハ、黄口ノ児スラ、口ヲ放ツテ、漢土ノ聖人ハ皆迂濶ナリ、我 邦ノ神道ハ、固陋ナリト嘲笑ス。今十年来ノ事ナルニ、猶此クノ如クンハ、今ヨリ数十年ノ久シキヲ経ハ、彼必ス我儒道神道ニ抗スルタメニ、其所謂天教ナルモノヲ、口ニハ唱ヘスシテ、心ニ信スル者出ツヘシ。此事 官ノ明断ニテ、預シメ法禁ヲ設クルニ非サレハ、其害勝テ言フヘカラサルニ至ラン。

と言う。引用が長くなったが、ここでも洋学の必要性を認めながらも、その撰取すべきものに対する考え方は、佐久間象山や橋本左内などの多くの近世後期の人物たちに相通するものがある。あの有名な新井白石の「ここに知りぬ、彼方の学のごときは、たゞ其形と器とに精しき事を。所謂形而下なるもののみを知りて、形而上なるものは、いまだあづかり聞かず。」(『西洋紀聞』)という主張の延長線上にあろう。⁽³⁹⁾

四 旭莊と洋学関係書及びその経世論

先に引用した『九桂草堂隨筆』卷一の涉獵した書名を列挙した部分の後段で、「諸家ニ就テ、西洋ノ訳書、百餘種ヲ抄録セリ。是レ江戸四年ノ間ノ業ナリ。」と述べている（広瀬旭莊の海外認識と海防思想に引用）。これを見ても、旭莊がいかに洋学関係の書物に関心を持ち広く閲読していたかが示されている。

これは書簡からも窺えるところで、（嘉永三年）二月十三日付の淡窓宛書簡に「外国之事坤輿図誌之外写本ニて手ニ入兼候 私千辛万苦所集数十百冊 不_レ遠帰省之時可_レ携帰_一何卒今の内より筆工二十人計仕立置被_レ下度_⑩とある。また、（同五年）閏二月餘日付の青村宛書簡には「西洋書類一日も早く御返却 右ハ小生困厄中より数百金ヲ抛て集候故甚珍重候 箱ニ入れ御送可_レ被_レ下 耳損し候事大畏候_⑪とあつて督促している。さらに、（年未詳）二月七日付青村宛書簡では「唐人の書一卷入手 去年八九月迄の事有_レ之誠ニ大変也 朱氏ハ形も無_レ之 洪秀泉_⑫と申者張本 南京ニて帝と称シ 清の罪ヲ数ル詔書ニ通愉快也 其外珍書英魯墨の一件五冊入手_⑬と、太平天国の乱に関する情報と共に述べている。

それでは、具体的にどのような書物を、旭莊は見たのであろうか。それを探索する方法として、その生家にある先賢文庫と日田市立淡窓図書館（咸宜園蔵書を取蔵）の蔵書を確認することが考えられよう。_⑭ 筆者はこれまでに三度両所を訪問したが（洋学関係書については未見）、何れが淡窓のもので何れが旭莊のものかを特定することは困難と思われる。しかし、両所を詳細に調査された杉本氏の研究（前掲の諸論稿）において、「旭莊珍藏」印のある書籍の存在を指摘しておられるのは注目される。それを杉本氏の論稿から摘記すると、青地林宗訳『輿地誌略』山村昌永『訂正増補采覽異言』ブルウデル著・馬場貞由訳『魯西亞誌』筆者不詳『釣遠探隠要録』林洞海著『水夫漂流記』枝芳軒著『漂流安南記』桂川甫周著『北椏聞略』佐藤信淵著『西洋列国誌』筆者不詳『那波礼温略伝』塩谷岩陰著『籌海私議』大槻

盤溪著『猷芹微衷』林子平著『三国通覽図説』ケンペル著・高橋景保訳『日本紀事抄』筆者不詳『俄羅斯武備誌』金大理著『清朝討英夷檄文』などとのことである。⁽⁴⁴⁾これらは、旭莊所蔵のものと考えられよう。

このような蔵書の調査と、『日間瑣事備忘録』を初めとする著述の精読、それと合わせて書簡の検討などを並行して進めることによって、旭莊の閲読した洋学関係書の範囲もより明らかになるのではないだろうか。例えば、魏源撰『海国図志』(百卷)について、手紙で次のように言及している。(年未詳)臘月二十一日付青村宛書簡で、「海国図志御買ナキ由残念也 小生ナラハ右之学を以二年中 此金丈取返し候事易々也⁽⁴⁵⁾」と述べている。また、宛名月日欠の別な書簡でも、「海国図志中より 英夷天竺ヲ取ルニ初ハ商人六十五人遣シ土人と随意ニ交易致セ⁽⁴⁶⁾」以下、同書の内容を一部要約している。ここから、旭莊が『海国図志』を読んでいたことが、充分推測できよう。

さて、旭莊の経世論であるが、特に海防論に関して淡窓以上に強い関心を持っていたことが窺われる。書翰集においても、二九一・三三二・三三五・四二三・五一九・五三七・五四三の各頁などに収録されている手紙にもそれは見えている。また、『梅墩詩鈔』の後を受け、嘉永六年から文久三年の間という晩年の詩を集めた『梅墩遺稿』にも、対外情勢を踏まえた詩が収められている。⁽⁴⁷⁾今は題を掲げるだけに留めるが、「初冬、宿橋本桂園家、賦贈」、「大礮引、贈高秋帆」、「聞菊池海莊奉主旨練鄉勇、賦此以寄」、「通浦寒濤」がそれである。

そして、旭莊の海防論の具体相は、『異船議』『識小編⁽⁴⁸⁾』などに述べられているが、これについては杉本氏の詳細な研究(「広瀬旭莊の海外認識と海防思想」)があるのでここでは省略する。なお、同論稿で杉本氏は、淡窓・旭莊の海外認識について、淡窓は「謙虚な立場」旭莊が「自信のある態度」を持っていることを指摘され、その差異はその情報の蓄積の多少によるとされた。妥当な見解であるが、両者の性格の相違もその一因を成しているのではなからうか。

おわりに

本稿は、杉本氏の諸論稿の骨子を踏まえ論述してきた。杉本氏の優れた研究業績に対して、「毛を吹いて疵を求む」の感は否めないが多少の誤解を訂正できたのではなからうか。また、引用されていない史料も、若干付加できたのではないかと思う。

ただ、旭荘の『日間瑣事備忘録』を活用できなかったように、両者の著述の全体的な通覧と精読の必要性を感じる。また、杉本氏が交友のあつた洋学者や門人との影響関係に言及されているが、それは十全とは言い難い。本稿ではその問題に全く触れることができず、この小稿を「序論」とした所以でもあるが、その点の解明は極めて重要であろう。これについても後日を期したいと思う。

註

- (1) 『東瀛詩選』（汲古書院、昭和五十六年）。愈樾は江戸時代の数多の漢詩人の中でも特に旭荘を推賞し、同書で旭荘のみ二卷（卷二十三・二十四）を占めている。
- (2) 『史淵』一〇五・一〇六合輯号（昭和四十六年八月）。後に補訂されて、杉本氏編『九州天領の研究―日田地方を中心として―』（吉川弘文館、昭和五十一年）本編第三章第二節「咸宜園と洋学」に収録された。なお、淡窓に関する研究史については、拙稿「広瀬淡窓研究史試論」（『國學院雑誌』八十六―六、昭和六十年六月）参照。
- (3) 『蘭学資料研究会研究報告』二五九（昭和四十七年六月）。旭荘に関する研究史については、拙稿「広瀬旭荘『日間瑣事備忘録』考―諸儒との交遊を中心として―」（『大倉山論集』二十二、昭和六十二年十二月）参照。
- (4) 『蘭学資料研究会研究報告』二七二（昭和四十八年七月）。

- (5) 『史学論集対外関係と政治文化』（吉川弘文館、昭和四十九年）所収。
- (6) 思文閣、昭和五十九年。
- (7) 『増補淡窓全集』上（思文閣、昭和四十六年複製）所収、一部句点を読点に改めた。
- (8) 総論で近世儒学の変遷（三変）を述べ、各論で近世の儒者を批評した著述。『増補淡窓全集』中、『日本儒林叢書』三（鳳出版、昭和五十三年複製）等に所収。
- (9) 広瀬林外（旭荘の実子で淡窓の養子となった）の編輯した淡窓の語録。『増補淡窓全集』上所収、卷三まで内題は「燈下記聞」、返り点・句点はそのまま。
- (10) 門人が編輯した淡窓の語録、『増補淡窓全集』上所収、一部句点を読点に改めた。
- (11) 前掲『九州天領の研究』。「咸宜園と洋学」（『史淵』）には、この詩は引用されていない。なお、杉本氏は『懐旧楼筆記』巻五十四から引用されているが、同一内容のものが『遠思楼詩鈔』（『増補淡窓全集』中、『詩集日本漢詩』十一）汲古書院、昭和六十二年）等に所収）第二編下にも収録されている。返り点は『増補淡窓全集』による。
- (12) 『増補淡窓全集』中所収。句点・返り点はそのまま。
- (13) 『増補淡窓全集』中所収。一部句点を読点に改めた。
- (14) 淡窓の主著の一つ『約言』の義を述べたもので、国文と漢文の二種ある。『増補淡窓全集』中所収。一部句点を読点に改めた。
- (15) 『九州天領の研究』では、この史料を引用され、今引いた文章に代えて「儒学を中心におきながらも、和洋の学を加えなければ、今後の学校の教科制度は成り立たないとの、ぬきさしならない認識の上に立っている」となっている。
- (16) 前述のように『六橋記聞』は林外によって編輯されたが、時々「大人」と淡窓のことを表記している。
- (17) この引用箇所は、杉本氏『九州天領の研究』でも使用されている。なお、「咸宜園と洋学」には引用されていない。

い。

(18) 伊東多三郎氏「禁書の研究」(『近世史の研究』一(吉川弘文館、昭和五十六年)所収) 参照。

(19) 咸宜園に学んだ後、亀井昭陽に師事、次いで鳴滝塾に入った。板沢武雄『日蘭文化交渉史の研究』(吉川弘文館、昭和三十三年) 参照。

(20) 本文に記さない場合は、杉本氏が引用されている史料はカッコ内に註記することとする。

(21) 長寿吉・小野精一両氏共編『広瀬淡窓旭莊書翰集』(弘文堂書房、昭和十八年) 四十四頁。この手紙を杉本氏は「おそらく文政後半」(『咸宜園と洋学』、『九州天領の研究』)とされたが、文中に「謙吉も先頃より讃州金毘羅へ来詣在宿不仕候間御伝言も不申候」とあり、旭莊(謙吉は旭莊の通称)のそれは文政十年四月のこと(九月に帰郷)であるから同年の手紙であろう。なお、『己克篇』は不詳。

(22) 『増淡窓全集』中所収。句点・返り点はそのまま。以下の日記からの引用は同様。

(23) 『懐旧楼筆記』巻四十四上欄の秋帆に関する批評を、杉本氏は淡窓の意見と取られているようだが、これは門人の批評である。同書巻五十六上欄の元瑞についての批評も同様である。

(24) 『新井白石の洋学と海外知識』(吉川弘文館、昭和四十八年)。

(25) 提要はその日記の内、弘化二年から嘉永六年の間記されている。

(26) 『増淡窓全集』下所収。句点・返り点はそのまま。

(27) このことについては、『懐旧楼筆記』巻五十四に詳しく述べられている。

(28) 『教聖・広瀬淡窓の研究』(第一出版協会、昭和十年)、『咸宜園と日本文化』(第一出版協会、昭和十七年) 参照。

(29) 『広瀬淡窓』(日本教育先哲叢書十、文教書院、昭和十八年) 参照。

(30) 『増補淡窓全集』中所収。一部句点を読点に改めた。

(31) 『西南文運史論』（岡書院、昭和元年）。

(32) 『日本儒林叢書』一（鳳出版、昭和五十三年複製）所収。

(33) 『日本儒林叢書』二（同前）所収。同書引用の句点を一部読点に改めた。

(34) 坂本太郎先生『日本の修史と史学』（至文堂、昭和四十一年）参照。

(35) 淡窓の門弟矢野範治、後に淡窓の養子となった。

(36) 『広瀬淡窓旭莊書翰集』四五四頁。この手紙は同書では安政二―五年の青村宛に編入されており、杉本氏は同二―三年と年代推定されているが、根拠は示されていない。ただ、同書簡中に「嘉永廿五家御写取済候は、御返却可_レ被_レ下候」とあり、少なくとも嘉永年間以降であることは知られる。

(37) 同書翰集三七四頁。

(38) 『広瀬旭莊全集』随筆篇（思文閣、昭和六十一年）。

(39) 宮崎道生先生『世界史と日本の進運』（刀水書房、昭和五十四年）参照。なお、杉本氏は「咸宜園と洋学」において、「旭莊の洋学観をここに約言するならば、結局儒者の立場からの「採長補短」の域をいわず、「東洋道德、西洋芸術」観を堅持するものであった。ただそうした制約内では、旧弊にとられない自由闊達で、しかも合理的な言説をおこないい、まます卓見の閃きをしめしている。」と言われている。これは同氏の別稿「広瀬旭莊の海外認識と海防思想」を併読すれば、概ね首肯できよう。ただ、「咸宜園と洋学」に限定すれば、その主な根拠に前引の書簡を利用されているので、論証に不十分な点が感じられる。

(40) 前掲書翰集四一八頁。杉本氏は諸論稿にこの手紙を引用され、年代を嘉永から安政年間とされている。しかし、こ

のすぐ後に「十月浄喜公十七回忌ニハ是非帰省之志ニ候」とあるから、父貞恒（浄喜は諡、天保五年歿）の十七回忌の年を特定できる。

(41) 前掲書翰集四八八頁。杉本氏「咸宜園と洋学」、『九州天領の研究』に引用。

(42) 前掲書翰集四九二頁。杉本氏の諸論稿に引用。

(43) 杉本氏「豊後日田の広瀬家史料の調査によせて」（『日本歴史』二七二、昭和四十六年一月）参照。なお、九州大学九州文化史研究施設によって、『広瀬家文書仮目録一（家宝）』などの目録が発行されている。

(44) この書目は杉本氏の諸論稿で若干の異同があるが、ここでは『九州天領の研究』から摘記した。なお、これらは全て写本とのことである。

(45) 前掲書翰集五一頁。

(46) 前掲書翰集五四四頁。

(47) 前掲『詩集日本漢詩』十一所収。

(48) 両書共に『梅墩叢書』（前掲『広瀬旭荘全集』隨筆篇）所収。

〔付記〕 本稿脱稿後に、田中加代氏『広瀬淡窓の研究』（ベリかん社、平成五年二月）が刊行された。同書において田中氏は、淡窓に関する研究史を精緻に分析されておられる。また、最近日田を訪れ（平成五年三月）、日田市立淡窓図書館の移転に伴い、咸宜園蔵書が広瀬家に戻されたことを知った。